

個に応じた遊びの指導の実施における指導計画作成と評価

小坂 理恵

I 問題

遊びの指導は、領域・教科を合わせた指導の形態の一つとして知的障害教育における教育課程に位置づけられている(文部省,1993)。

遊びの指導は、教師がよほど自覚的に取り組まないと目的や方法が明確になりにくい(岡嶋・藤田,2002)。したがって、「計画の段階から児童の実態を十分に把握し、弾力的な計画を立てながら、常に計画をよりよいものに修正し発展させる姿勢」(文部省,1993)が大切である。

また、評価についても「指導される具体的な内容をあらかじめ準備し、一人一人の児童がどのような行動目標に即した活動を行ったのか、そしてそれがどの程度、獲得されたのかという評価を正確に行う」(文部省,1993)必要性が示されている。

平成 21 年 3 月告示の特別支援学校学習指導要領では、各教科等における個別の指導計画作成が義務づけられた。個別の指導計画作成は、教師側の専門性やその自覚が問われる(岡嶋ら,2002)。

遊びの指導においても、個の実態に基づく指導計画作成及び評価は重要である。また、学習指導要領では「生活に結び付いた内容」がポイントになっている(尾崎,2009)ことから、遊びの指導についても実際の指導が個の生活に反映しているか否かを把握し、授業に情報をフィードバックすることが重要である。

II 目的

個の実態や生活の状況に応じた授業を展開し、評価をその後の生活や授業にいかせる遊びの指導のあり方について、以下の点から検討する。

- 1 遊びの指導の指導計画作成の実態
- 2 遊びの指導の評価の実態
- 3 遊びの指導の授業実施における配慮・工夫

III 研究 I

1 目的

遊びの指導の指導計画作成及び評価の実態、並びに日常生活との関連について明らかにする。

2 方法

全国の知的障害、肢体不自由の特別支援学校(併置校を含む)で遊びの指導を教育課程に位置づけている 61 校の小学部に勤務する、遊びの指導の授業(主)担当者 61 名を対象に、郵送による質問紙調査を実施した。調査期間は、2010 年 4 月～6 月であった。調査項目は予備調査で確定した以下の質問項目を用いた。

- 1)遊びの指導の年間指導計画及び単元(題材)ごとの計画並びに個別の指導計画作成の実態
- 2)遊びの指導の授業実践上における配慮・工夫
- 3)遊びの指導の指導計画における評価の実態
- 4)遊びの指導と日常生活への反映状況
- 5)遊びの指導の実施上の課題及びその対応

3 結果と考察

61 校中 60 校から回答を得ることができた。

指導計画の作成について、遊びの指導を含んだ個別の指導計画を作成している学校は 88.3%、年間指導計画を作成している学校は 96.7%、同じく単元(題材)ごとの計画を作成している学校は 71.7%あり、個別の指導計画を中心に年間指導計画や単元(題材)ごとの計画も併せて作成している学校が多いことが明らかになった。また、年間指導計画や単元(題材)ごとの計画の目標、指導内容を決定する過程で参考にする情報の収集源について、年間指導計画で 58.6%、単元(題材)ごとの計画で 58.1%の割合で個別の指導計画をあげていた。個別の指導計画から収集している情報の内容は、「遊びに関する興味・関心」が最も多く、次いで「遊びの実施に関する諸能力」、「遊びの経験」であった。「生活における余暇の過ごし方」をあげ

表1 年間指導計画で個別の指導計画から収集する情報の内容
(複数回答) N=58

項目	回答数
遊びに関する興味・関心	36
遊びの実施に関する諸能力	33
遊びの経験	25
他の教科や合わせた指導との関連	11
余暇の過ごし方	8
季節や時期	8
他の教科や合わせた指導との関連	6
地域特性	1
その他	4

表2 遊びの指導の授業実践上の配慮・工夫
(複数回答) N=60

項目	回答数
子どもの興味・関心の高い題材の用意	54
教師と子ども、子ども同士のかかわりを促す環境設定	52
安全に遊べる環境の設定	50
実態が異なる子どもも使える教材・教具	41
実際の子どもの姿を通して遊具や教師のかかわりの工夫	38
遊びが広がる環境、手立てを設定	33
子どもの思いや季節のテーマを基に単元を構成	28
遊びの題材を豊富に用意	20
子どもの生活の実態等に即した個別の授業目標や学習活動の設定	17
他の時間に配慮した活動	14
その他	6

た学校は少数だったが、「遊びの経験」とあわせていずれかを回答した学校は5割弱であった(表1)。

指導計画の評価について、個別の指導計画の作成している学校の96.4%、年間指導計画を作成している学校の79.3%、単元(題材)ごとの計画の作成している学校の73.8%が評価を行っており、個別の指導計画はほとんどの学校で評価されている一方で、年間指導計画や単元(題材)ごとの計画は7割強であり、比較的少なかった。

遊びの指導の活動の日常生活への反映について、反映していると推察している学校が86.7%で、さらに日常生活への反映状況について具体的に把握しているとした学校は、70.0%であった。

遊びの指導の日頃の授業を実践するうえでの配慮・工夫については、「子どもの興味・関心の高い題材」、「教師と子ども、子ども同士のかかわりを促す環境」、「安全に遊べる環境」が多く、子どもの興味・関心が優先であることがわかった。その他では、「遊びの題材が豊富になるよう、年間指導

表3 遊びの指導実施上の課題 (複数回答) N=60

項目	回答数
個々の多様な実態やニーズに応じた題材設定の困難	31
遊びの指導そのものに関する理解の曖昧さ	20
活動がパターン化・マンネリ化に陥りやすい	19
授業展開の発展	18
遊びの指導の遊び観が教師間の相違	17
遊びの指導と子どもの生活との関連に対する配慮	17
遊びの指導の指導計画作成、評価	16
活動が教師主導に陥りやすい	15
教師同士の話し合いの時間の不足	13
遊びの指導の教育課程上の位置づけの曖昧さ	10
その他	8

計画作成段階から配慮をする」などがみられ、全体として単元構成から授業の教材・教具まで多岐にわたっていることがわかった(表2)。

遊びの指導実施上の課題では、「個々の多様な実態やニーズに合わせた題材(単元)設定への配慮」といった個への対応に関するものが最も多く、次いで『遊びの指導』そのものに関する理解の曖昧さ、「活動がパターン化・マンネリ化」、「遊びの指導』の授業展開の発展」であった(表3)。

課題全般への対応としては、学部・学校内での研修により遊びの指導のねらいや教師の支援方法の共有化を図り、遊びの指導そのものに関する理解を深めたり、各学校や教師の遊び観を確認したりすることがあげられた。また、最も課題としてあげられていた「個々の多様な実態やニーズに応じた題材(単元)設定」への課題では、複数の教材を用意したり、日常的な情報交換だけでなく、ケース会議や指導グループの教員で定期的な話し合いの場を設けたりすることで対応している学校がみられた。「授業展開の発展が難しい、教師主導に陥りやすい」、「パターン化・マンネリ化しやすい」という課題においても、定期的な話し合いを含めた、十分な話し合いを重要視しており、ティーム・ティーチングを活用して反省したり様々な先生から意見をもらったり、担当者を変えたりしていることが明らかとなった。

興味・関心を含め、個の実態を重視することが重要であり、より個別の指導計画活用の割合を高めていくことが必要である。

IV 研究Ⅱ

1 目的

個に応じた遊びの指導の授業における具体的な配慮・工夫、及び評価について明らかにする。

2 方法

研究Ⅰの回答状況から、遊びの指導の年間指導計画及び単元(題材)ごとの計画作成において個別の指導計画の活用がみられた特別支援学校2校の遊びの指導の(主)担当者2名に半構造化面接による調査を行った。調査時期は2010年11月～12月であった。調査項目は以下の項目を用いた。

1)遊びの指導の授業づくりにおける配慮・工夫

2)遊びの指導と子どもの日常生活との関連

3)遊びの指導の実施上の課題への対応

3 結果と考察

A校では、昨年度各指導計画の連動化が図られるとともに、今年度個別の指導計画の中で遊びの指導を他教科と同様に明確に位置づけた。

授業づくりにおける具体的な配慮・工夫の一部として、日常の情報交換や放課後の集まり、単元の始め・途中・終わりに行う定期的な学年会議、日々の評価の用紙やネットワーク上の情報共有の機会があり、教師間の指導の共通理解や児童個々の実態に応じた指導の実施を最重視していた。その評価は次年度や次時の授業にいかされ、過去の資料をもとに内容や目標を改めて検討するよう心がけており、全員で授業を行っているという意識をもちながら、適宜個に応じて手立てや教材教具の修正を行っていた。授業の前後においてチームでPlan-Do-Check-Actionを重視していることが明らかになった。

B校では、授業づくりにおける具体的な配慮・工夫の一部として、年間の題材数を増やし興味・関心を広げることや、ゲームを通じて友達と協力する活動を取り入れること、複数の題材を用意して多様な児童の実態にきめ細かく応じることや、生活の中の行事と関連させた授業を行うこと等を挙げていた。その他、余暇につながるような指導計画作成と評価に努めており、調理遊びや雪遊び等、日常生活に直結しやすい題材を設定したり、

家庭との連携を積極的に行ったりしていることが明らかになった。特に自閉症児に対しては、授業における題材の工夫だけでなく、遊びの時間と場を家庭でも設定することや、遊びの終了の仕方を家庭内でも一貫するよう保護者に働きかけていた。その結果、遊びの広がりや活動量の増加、授業での遊びを家庭で楽しむという報告が保護者からされていた。文部省(1993)は、遊びが将来の余暇利用につながることを示唆しており、児童個々の日常生活に遊びの指導を関連づけることの重要性が改めて浮かび上がった。

V 総合考察

遊びの指導においては、年間指導計画及び単元(題材)ごとの計画作成は高い割合で行われているものの、作成時での情報収集源として個別の指導計画を活用している学校は約6割、評価を行っている割合が7割強であった。個別の指導計画を活用して児童の実態を的確に把握し、児童の変容を評価し、日常生活への反映状況と関連づけながら、次時や次年度の活動にいかすことが重要である。安藤(2001)は、複数教師で個別の指導計画を作成し活用することの必要性を述べている。これは遊びの指導においても同様である。具体的には、開始前に、①担当者間で研修や会議等を通して遊びの指導のねらいを共有化することや②個別の指導計画を含めた指導計画立案を複数教師で行い、個々の児童の目標を具体的に設定し、教師全員で共通理解を図ること、実施中には、③教師全員で授業をつくる意識をもち、授業や教材教具を日々修正・改善することや、実施後には、④目標に基づき、変容が伝わるような具体的な評価を行い、生活への反映状況を具体的に把握することの重要性が示唆された。子どもが満足感や成就感を得ながら、遊んでいる環境をつくることが重要である。

文献

- 安藤隆男(編)(2001)自立活動における個別の指導計画の理念と実践. 川島書店.
 文部省(1993)遊びの指導の手引.
 文部科学省(2009) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領特別支援学校
 岡嶋賢治・藤田裕司(2002)障害児教育における「個別の指導計画」: 実態調査を通して見た今日の課題大阪教育大学紀要. IV, 教育科学 50(2), 293-306.
 尾崎祐三(2009) 学習指導要領の改訂と今後の知的障害教育の課題. 特別支援教育, 34, 16-17.